

日本顎口腔機能学会第 54 回学術大会報告

鹿児島大学学術研究院医歯学域歯学系歯科矯正学

大会長 宮脇 正一

準備委員長 大牟禮 治人

日本顎口腔機能学会第 54 回学術大会は、鹿児島大学学術研究院医歯学域歯学系歯科矯正学担当教授の宮脇正一を大会長として、平成 27 年 4 月 18 日、19 日の 2 日間、鹿児島大学郡元キャンパス学習交流プラザで開催されました。大会には計 143 名、懇親会には計 103 名によるシンポジウムと鹿児島大学学術研究院医歯学域医学系消化器疾患・生活習慣病学担当教授の井戸章雄先生による特別講演が開催され、いずれのセッションにおいても活発な議論が行われました。

初日は大会長の挨拶で始まり、続いて松本歯科大学教授の山田一尋先生を座長として、日本歯科大学の上杉華子先生が「咀嚼能力と咀嚼運動との関係」、長崎大学の吉見知子先生が「ボツリヌストキシン注入後の咀嚼筋機能低下によるマウス咀嚼運動の変化」、日本大学松戸歯学部根岸慎一先生が「現代日本人児童の口腔機能が歯列形態の成長発育に及ぼす影響」についてそれぞれ発表されました。続いて新潟大学教授の井上誠先生を座長として、岡山大学の萬田陽介先生が「舌後方部挙上運動をオトガイ下部筋活動から分離検出する表面筋電図法の確立」、大阪歯科大学の覺道昌樹先生が「超音波画像を用いた咀嚼時舌動態の観察—下顎両側遊離端義歯の装着が与える影響—」、広島大学の川野弘道先生が「棒付き飴を用いた新しい口腔機能リハビリテーション法」について発表されました。初日の午前の部は、午前 8 時 35 分の開始にもかかわらず、舌機能を中心とした様々なテーマについて多くの参加者による活発な議論が行われました。



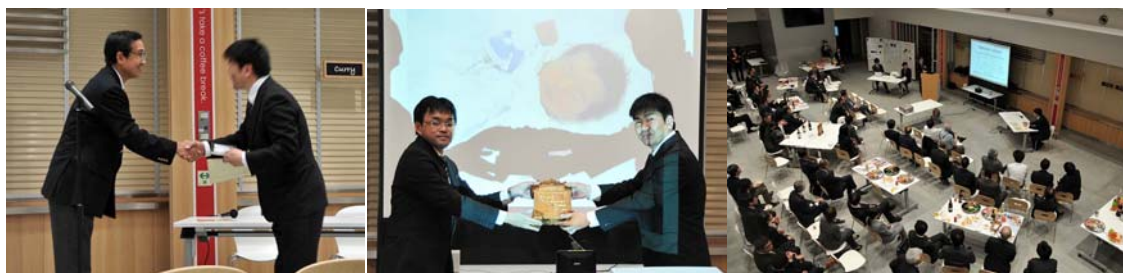
初日の午後の部は、昭和大学教授の井上富雄先生を座長として、新潟大学の林宏和先生が「姿勢の違いが摂食嚥下機能に与える影響」、大阪大学の村上和裕先生が「ゼリー押し潰し摂取における Stage II transport と舌圧発現様相の関係」、新潟大学の酒井翔悟先生が「上喉頭神経刺激による口腔感覚の変調」について発表されました。続いて、長崎大学教授の吉田教明先生を座長として、長崎大学の岡安一郎先生が「口腔顔面領域の体性感覚における局所麻酔の効果」、国際医療福祉大学の三浦寛貴先生が「咬合接触状態が安定域面積と重

心動揺面積に及ぼす影響（第一報）」について発表されました。初日の午後の部は、摂食嚥下を中心に歯科以外の領域からの発表もあり、座長の巧みな進行で、活発な議論が行われました。

特別講演は、鹿児島大学学術研究院医歯学域医学系消化器疾患・生活習慣病学担当教授の井戸章雄先生をお招きし、「肝再生・修復の分子機構：Bench-to-Bedside」の演題で、宮脇正一大会長を座長として行われました。井戸章雄先生は、我々との共同研究のテーマである上部消化管と口腔領域との機能的な関連について概説された後、HGF（肝細胞増殖因子）の医薬品化について、その基礎研究からアカデミアが主導して実施した臨床試験（医師主導治験）、そして製薬企業への橋渡しに至るまでご自身の経験を踏まえたご講演を頂きました。総額 20 億円超の研究費で、現在も引き続き進められているトランスレーショナル・リサーチに対して参加者は熱心に聞き入り、井戸教授は講演直後や懇親会の際に、多くの参加者の質問に対して丁寧に答えられていました。



特別講演終了後、シンポジウム兼懇親会が行われました。懇親会の冒頭では、第 53 回学術大会（川良美佐雄大会長）優秀賞の授賞式の後、第 52 回学術大会優秀賞 1 位の兼松恭子先生の研究指導教員で今大会の準備委員長である大牟禮治人から、第 53 回学術大会優秀賞 1 位の岩手大学佐々木誠先生にサインボードが手渡されました。その後、第 52 回学術大会で優秀賞を受賞した 3 名の若手研究者による「機能研究の未来創造～2050 年の顎口腔機能研究～」と題したシンポジウムが行われました。徳島大学の大本勝弘先生は「顎口腔機能が関連した脳機能評価技術の発展」、新潟大学の真柄仁先生は「感覚刺激がもたらす嚥下機能の変化」、そして大阪大学の皆木祥伴先生は「口腔咽頭の機能障害とその変化」と題し、現在それぞれで進めている研究の将来について熱弁を振るわれました。いずれのスライドも工夫が凝らされ、また、共同研究者のビデオ出演などもあり、プレミアム焼酎の森伊蔵がすぐなくなるほどの盛り上がりを見せ、座長の小林博先生や佐々木誠先生の絶妙な進行のもと、熱心な意見交換が行われました。その後、鹿児島黒豚のしゃぶしゃぶなどを食しながら、熱気あふれる懇親会へと続きました。





学術大会 2 日目は、北海道大学教授の山口泰彦先生を座長として口演が始まりました。鹿児島大学の岩崎智憲先生は「上気道流体シミュレーションの閉塞性睡眠時無呼吸症候群への臨床応用」について発表され、この日も熱気あふれる質疑応答が行われ、午前 8 時半から会場のボルテージが一気に上がりました。松本歯科大学の竹花快恵先生が「方向別口唇閉鎖力からみた歯列の特徴について」、明海大学の太塚英稔先生が「日中のバイオフィードバック訓練が夜間睡眠時の脳波に及ぼす影響」について発表され、睡眠関連の様々な問題に関するディスカッションが行われました。最後のセッションは、松本歯科大学教授の増田裕次先生を座長として、愛知学院大学の松永知子先生が「下顎位ならびに咬合高径の変化に対する低閾値開口反射の適応変化」について、昭和大学の立川哲史先生が「除脳ラット灌流標本を用いた自発呼吸に伴う頸筋支配神経活動の解析」について、日本大学松戸歯学部の薦田祥博先生が「顎運動と舌運動の相互作用が運動野の可塑性変化に及ぼす影響」についてそれぞれ発表され、最後まで活発なディスカッションが続きました。

前回から始まった演者の相互評価による優秀賞に関して、明海大学の太塚英稔先生が栄えある優秀賞 1 位となり、岡山大学の萬田陽介先生と新潟大学の酒井翔悟先生も優秀賞に輝きました。閉会の辞では、次期大会長の大阪大学教授矢谷博文先生の代理で次期準備委員長の瑞森崇弘先生がご挨拶されました。

最後に、この度の学術大会の開催にあたり、ご協力を頂きました全ての皆様に心から感謝の意を表しますとともに、本学会の益々のご発展を祈念申し上げます。

